

アッレ語動詞節の接続方法に関する一考察*

吉野 宏志

要旨

アッレ語において動詞節の等位接続と従位接続の明確な区別は困難であるとされている (Amborn et al. 1980: §98)。副詞節については後置詞が動詞の直後に置かれたりする (Amborn et al. 1980: §101) ことから判別しやすいが、等位接続やその他の従位接続では独立節を作る動詞活用と作らない動詞活用、そして動詞に付加される様々な接語の組み合わせは多岐に渡っている (Tosco 2008: 213-223)。本稿では、筆者がエチオピアでの言語調査を経て独自に収集したアッレ語資料を用いて、アッレ語における動詞節の接続方法について先行研究を踏まえて考察する。

キーワード

アッレ語 クシ語 動詞 等位接続 従位接続 関係節

1. はじめに

本稿の目的は、筆者がフィールドワークにより独自に収集したアッレ語¹音声言語の文字化資料を用いて、アッレ語における動詞節の接続方法について考察することである。本稿では先行研究の Amborn et al. (1980) と Tosco (2008) で得られた成果に基づいた分析を行う。

アッレ語 (Alle) はアフロアジア語族クシ語派東クシ語デュライ語に属する言語で、エチオピア連邦民主共和国 (以降、エチオピア) の南部諸民族州アッレ地区で話されている。アッレ地区は 2011 年に同州のコンソ特別区およびディラシェ特別区から独立して出来た新

* 本研究は、平成 25 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) (課題番号: 25・743) の助成を受けたものであり、本稿はその成果の一部である。エチオピアでの調査に際してインフォーマントの N.G.氏と G.A.氏には大変お世話になった。またアジスアベバ大学の Haregewoin 氏と、SIL から聖書翻訳のアドバイザーとして派遣されている Luminita Prisecaru 氏には、アッレ語研究やガウワダ村の動向について貴重な情報をご教授いただいた。

本稿で用いる略号は以下の通りである。BEN=受益者格、CONS=連続形、CONTR=対照、CON=接続詞、C=共通、DIR=移動方向標示、F=女性、GEN=属格、IMPF=非完結相、IMP=非人称、LNK=句・節の接続、LOC=位格、M=男性、NEG=否定形、PF=完結相、PRT=分格、P=複数、REF=参照標示、SIT=状況格、SUBORD=従属節、SUB=従属節形、S=単数、VP=動詞述語、V=動詞、∅=ゼロ形態素、1=1 人称、2=2 人称、3=3 人称、- =形態素境界、= =語境界。

¹ アッレ語という呼称はアッレ地区の独立以降に使われ始めたもので、それ以前はデュライ語 (Amborn et al. 1980) やガウワダ語 (Gawwada) (Tosco 2008) など様々に呼ばれていた。アッレ地区そのものが新しくエチオピア国内での認知度は低いため、定まった呼称はないようだが、本稿では 2011 年より当該言語の話者が自ら使用している名称である「アッレ語 (Alle)」に統一する。

しい地区であるが、隣接するコンソ特別区でも最近になってようやく認知され始めたばかりである。アツレ語には大別して 2 つの方言があり、本稿では地理的な特徴から高地方言と低地方言と呼称する。

表記法については Haregewoin & Yonas (2005 EC) にまとめられているラテン文字を使用する正書法に準ずるが、トーンについてはアツレ語において弁別性がないため本稿では省略し簡略化している。

2. 先行研究

Amborn et al. (1980) はアツレ語の最も重要な先行研究で、動詞節の接続方法に関しても分析がされている。Amborn らは両方言の話者 2 人ずつをインフォーマントとしているが、多くの記述が高地方言に基づいており、動詞に関してはこれが特に顕著に現れている。Tosco (2008) はアツレ語動詞節の接続方法について詳細な分析をしており、また用いている言語資料が低地方言のガウワダ方言である。次章での分析では、Amborn et al. (1980) に見られる不足を Tosco (2008) によって補う。

2.1. Amborn et al. (1980)

Amborn et al. (1980) では動詞節の接続方法に関して、等位接続 (§99)、従位接続 (§100)、副詞節 (§101)、そして関係節 (§48) について記述している。等位接続には接続詞 *pa* (あるいは *-ppa*) 「そして」を用いる (例(1)) が、これは動詞節の接続だけではなく名詞句同士を繋ぐものでもある。なお同時に起きている事象を表す動詞節の場合、接続詞 *-n(n)a* が接続詞 *pa* と同じ位置に現れる (例(2))。

(1) *haʔi-ppa ash:i*
 stand.PF.3MS-LNK go.PF.3MS
 “He stood up and went.” (Amborn et al. 1980: 122)

(2) *an-wosho-tayadha-na kan-karmo hiʔi*
 1-field-look_after.IMPF.1CS-PRT FOC-lion see.PF.1CS
 “While I was looking after the fields, I saw a lion.” (Amborn et al. 1980: 122)

なお等位接続として上記以外にも *ma* 「しかし」、*woy A woy B* 「A あるいは B のどちらか」、*-m* 「あるいは」が挙げられているが、これらは名詞句や動詞句を接続するものであるため、本稿では省く。

次に、従位接続でも接続詞 *pa* (*-ppa*) が主節と従属節の間に置かれるとしているが、動

詞の従属節形が主節の動詞形に先行する場合 (例(3)) と、その逆の場合 (例(4)) が区別されている (Amborn et al. 1980: 122-123)。なお接続詞 *pa* と接続詞-*ppa* の意味的な差異について言及されておらず、異形態として扱われている。

完結相 (perfective) の従属節形では単数形は全て *-u* で、複数形は 3 人称-*onki*、2 人称-*onku*、1 人称-*ooni* とされ、非完結相 (imperfective)² は完結相の主節形と同じ形態を持つとされる (Amborn et al. 1980: §79; §80)。なお、この従属節形は否定形としても用いられる³。

(3) *haʃu-ppa* *ash:i*
 stand.PF.3MS.SUB-LNK go.PF.3MS
 “He stood up and went.” (Amborn et al. 1980: 122)

(4) *an-hulli* *pa* *ʃakkadha*
 1-enter.PF.1CS LNK sit_down.PF.1CS.SUB
 “I went in and sat down.” (Amborn et al. 1980: 123)

しかし従属節が主節よりも後に現れる場合、完結相には特別な従属節形が存在し、1 人称・2 人称単数形-*a*、3 人称男性単数-*u*、3 人称女性単数-*i*、3 人称複数-*inki*、2 人称複数-*anku*、1 人称複数-*aani* となっている (Amborn et al. 1980: 122)。例(4)の従属節形はこの特別な語形を取っている。

副詞節は接語や接続詞化した側置詞によって特徴付けられる (Amborn et al. 1980: §101)。後置詞 *miinace* 「～の前に」が接続詞として用いられている例が挙げられている (例(5))。

(5) *okayni* *miinace*
 come.FUT.3MS.SUB before
 “before he comes” (Amborn et al. 1980: §101)

この副詞節でも従属節形が用いられることから、意味的にも形態的にも従位接続の一種として捉えるのが妥当だろう。

関係節の場合は通常であれば接続詞 *hu/ho* が先行詞と動詞の主節形の上に置かれる (例(6)) が、接続詞が現れない (稀な) ケース (例(7)) では従属節形が用いられる (Amborn et al. 1980:

² 未来時制の活用も存在するが、非完結相の語幹と活用語尾の間に接尾辞-*n* が挿入された形であるため、ここでは省略する。

³ その際、(i) 動詞には動詞に後接語が付加されず、(ii) 1 人称と 2 人称は代名詞が義務的であり、(iii) 高地方言では代名詞の部分重複が起こり、(iv) 高地方言のドバセ方言と低地方言のゴランゴ方言では 3 人称に否定後接語 *ye* が用いられるという規則が立てられている (Amborn et al. 1980: §83)。

93)。また、関係節の主語が先行詞ではない場合（例(7)）には主語後接語が主節形に付加され、接続詞 *te* によって先行詞を示し、受益者格を *-si* によって示している（Amborn et al. 1980: §49）。

(6) qawho hu okayi
 man CON come.PF.3MS
 “the man who came” (Amborn et al. 1980: 93)

(7) sikte te-si an-teehi
 pot CON-BEN 1-give.PF.1CS
 “the pot which I gave him” (Amborn et al. 1980: 94)

Amborn et al. (1980) における動詞節の接続を要約すると表 1 のようになる。

表 1 : Amborn et al. (1980: §§99-101) の要約

等位接続	主節形 + <i>pa/-ppa</i> + 主節形 ; 主節形 + <i>n(n)a</i> + 主節形	
従位接続	従属節形 + <i>pa/-ppa</i> + 主節形 ; 主節形 + <i>pa/-ppa</i> + 従属節形	
	副詞節	従属節形 + 接続詞化した側置詞
	関係節	先行詞 + 接続詞 <i>hu/ho</i> + 主節形 先行詞 + 従属節形 先行詞 + 接続詞 <i>te</i> + 受益者格標示 + 主節形

2.2. Tosco (2008)

前述の通り Tosco (2008) はアッレ語低地方言の 1 つであるガウワダ方言の分析を行なっている。Tosco (2008: 213) はガウワダ方言に Amborn et al. (1980) の従属節形が見られなとし、関係節では主節と同じ活用形が使用されるとしている。ただし Tosco (2008) は先行詞が主語となる関係節について言及しておらず、Amborn et al. (1980) においても関係節に従属節形を用いるのは稀なケースとされていることから、アッレ語の基本的な関係節表現には主節形が用いられることが分かる。

Tosco (2008) は連続形 (consecutive) という動詞形が存在するとし、文の 1 つ目の節と 2 つ目の節に注目して、動詞形と付加されている接語によって分けて詳細に分析している。その組み合わせを分類すると表 2 のようになるが、それぞれの明確な意味的違いは小さい。

表 2 : Tosco (2008) で分析されている動詞節の組み合わせ

主節形のみ : 「A \emptyset B \emptyset 」、 「A=pa B \emptyset 」、 「AIMPF=na BPF」、 「A=ma B \emptyset 」
連続形を含む : 「A \emptyset BCONS」、 「A=pa BCONS」、 「A=na BCONS」
否定形を含む : 「A \emptyset BNEG」

Tosco (2008) が Amborn et al. (1980) と大きく異なる点は、(a) 連続形という新たな動詞活用を提示し、(b) 接語=ma を用いた動詞節の接続について論じているところである。しかし興味深いことに(a)の連続形には動詞クラスによって異なる2つの活用がある(Tosco 2008: 215) とされているが、このうちクラス1と呼ばれる方の活用は Amborn et al. (1980) が言うところの「完結相で現れる特別な従属節形」と語形が類似している(表 3)。

表 3 : Tosco (2008) の連続形と関連動詞活用形の比較表

	主節形の完結相	Amborn et al. (1980: 122) 特別な従属節形(完結相)	Tosco (2008: 215)	
			クラス 1	クラス 2
3ms	-i	-u	-u	-o
3fs	-ti	-i	-i	-oy
2cs	-ti	-a	-ay	-oy
1cs	-i	-a	-a	-o
3cp	-e	-inki	-anki	-onki
2cp	-te	-anku	-anku	-itonku
1cp	-ne	-aani	-ani	-inoni

特別な従属節形を基準に考えると、連続形との差異を次のように説明することができる。

- (i) クラス1連続形の2人称単数-ay: 主節形の非完結相(-ay)や連続形クラス2(-oy)との類推による変化
- (ii) クラス1連続形の3人称複数-anki: 特別な従属節形のように*-inkiであったものが、クラス1連続形の1人称および2人称の複数形からの類推による変化

しかし両者は異なる方言の資料に基づいているため、同一の活用形かどうかの判断は今後の調査研究の課題の1つである。

3. アッレ語資料

本稿で分析を試みる言語資料は、筆者が 2013 年 9~10 月にガウワダ村において収集したもので、前述の正書法に基づいて文字起こしした音声言語の文字化資料である。1 文ずつに区切っているが、複数の節が接続されている場合は 1 文としてまとめている。なお動詞活用については Yoshino (2013) に準拠した表記をしているが、グロスは Amborn et al. (1980) および Tosco (2008) の表記を参考にしている。

音声資料についてはインフォーマント G.A.にインタビュー調査を行って収集した資料の一部である。内容は『アッレの歴史』⁴で、現在の住民の祖先がどこからやって来たのかを説明している。

(8) 『アッレの歴史』(音声言語の文字化資料)

a)	warsho	xaani	allatte	torri=ssa	tedhammadhammay		
	people	1CP.GEN	Alle.LOC	speech=REF	several_times		
	a?	ine=gassadhi=ba	haydo	nu=ogayini			
	IMP=1CP=ask.PF.S=and	place	DIR=come.PF.1CP				
b)	haydo	lakki=na	galo=kka	an?=ogayini			
	place	two=PRT	direction=FOC	1=come.PF.1CP			
c)	garo	dokko	hayna	haallikko^sora	galo	boorangito=na	
	half	one	this	the_East	direction	Boraana.LOC=DIR	
	ogayi=ki		ʃaga				
	come.PF.S=FOC		exist.IMPF.S				
d)	gaffe	hibhay	hayna	garo	harso=nna	golu	garo sudanatte
	clan	some	this	half	Harso=DIR	direction	half Sudan.LOC
	nuusi (< nuu=si)		hagolu	ogayi=ki		ʃaga	
	from (< DIR=REF)		there	come.PF.S=FOC		exist.IMPF.S	
e)	gaffe	saka	gaffe^gaffe	sheege=pa	haani	ogayini	
	clan	these	clan_by_clan	have.PF.3CP =LNK	after	come.PF.1CP	
f)	pakke	xaani=ka	bago	to?okko	bago	allatte	godhi
	mouth.P	1CP.GEN=FOC	mouth	single	mouth	Alle.LOC	make.PF.IMP

⁴ 音声資料の文字化に際して、インフォーマント G.A.本人と、大学で言語学を修めたインフォーマント N.G.の協力を得ることができたため、語彙や文の意味やニュアンスだけでなく、形態素境界や統語構造についても非常に貴重な助言を頂いた。なお各タイトルは筆者が便宜的に付けたものである。

なお筆者は接語の独立性が高いと考えているため、Amborn et al (1980) では接辞と同様に形態素境界(標識: -)によって記されている場合でも、語境界(標識: =)を用いている。

g) hissa	garo	boorangito	nu=ogayi=ka	hissa	garo	hagto
those	half	Boraana.LOC	DIR=come.PF.S=FOC	those	half	the_North
ogayi=ka	ille=ma	bago	to?okko	godhi=ba		
come.PF.S=FOC	together=SIT	mouth	single	make.PF.S=LNK		
tannu	hossa=nu	alle	a?=ine=nabayi=ba	bago	xaani=ka	
then	that=DIR	Alle	IMP=1CP=call.PF.IMP=LNK	mouth	1CP.GEN=FOC	
bago	allatte	ine	nabayi			
mouth	Alle.LOC	1CP	call.PF.IMP			

訳「(a) 私たちアッレの人々……私たちはその話について何度も尋ねられましたが、私たちはある場所から来ました。(b) 私たちは2つの方角から来ました。(c) その1つは東の地で、ボラーナ村の方角から来ました。(d) いくつかの氏族はハルソ村の地から、つまりスーダンの方角、そこから来ました。(e) 私たち⁵が来た後、これらの氏族はそれぞれ氏族となりました。(f) 私たちの言語は単一の言語、つまりアッレ語、になりました。(g) ボラーナ村から来たものと北方から来たもの⁶が一緒になって単一の言語になり、そして、それ以来、私たちはアッレと呼ばれ、私たちは私たちの言語をアッレ語と呼んでいます。」

例(8)で動詞節の接続が見られる箇所について、その組み合わせを Tosco (2008) に準じた形で分析していくと次の4例が該当する。(8a,g)「主節形完結相=ba⁷+主節形完結相」、(8c-d)「主節形完結相=ki+主節形非完結相」、(8e)「主節形完結相+haani+主節形完結相」、(8g)「主節形完結相=ka+主節形完結相=ka+主節形完結相=ba+主節形完結相=ba+主節形完結相」。(8a-g)は「アッレの人々について何度も聞かれた」と「ある場所から来た」が接語=baによって繋がれており、ここでは逆接の等位接続として分析した(i.e.「何度も聞かれたが、私たちはある場所から来た」)。

(8c-d)では同じ表現が用いられているが、これはインフォーマント G.A.および N.G.によれば現在完了形 (present perfect) の表現である。この接語=ki (あるいは=ka) は通常ならば名詞に付加され、名詞句の焦点化 (Amborn et al. 1980: §30)、そして具格を標示 (Amborn et al. 1980: §65) したりする際に用いられる。接語=ki を動詞形へ付加する用法については先行研

⁵ この資料で「私たち」とはインフォーマント G.A.を含むガウワダ村住民を指しているため、「ガウワダ村住民が属するオスピコ氏族のやって来た後に」という意味である。

⁶ 「ボラーナ村の言語」と「北方の言語」のことを意味している。

⁷ Amborn et al. (1980) や Tosco (2008) は pa/ppa と表記しているもので、低地方言では非常に多くの場合有声音として発話され、実際にこの箇所ではインフォーマント G.A.は無声音で発話していなかったため、本稿の当該資料では ba と表記する。明らかに無声音で発話しているところは無声音で表記する。

究 (Amborn et al. 1980; Tosco 2008) には見られなかった。Tosco (2010: 330, (30)) では本稿資料(8c-d)と類似した表現 (ただし接語=kka が使用されている) を「対照 (contrast) させる標示」として分析しているが、先行詞が主語となる関係節を導く接語 ho が用いられている点で異なっている (例(9))。

- (9) ... ?olokko ho koro poqh:a=kka i=ʕaka=pa
 ... thing which people kill.IMP.F.3MS=CONTR 3=exist.IMP.F.3MS=LNK
 「...there is also something which kills people」 (Tosco 2010: 330, (30) ; ただし形態素分析とグロス は筆者による)

Tosco (2010) のʕaka は本稿のʕaga と対応しており、「動詞主節形=kV+ʕaga」という表現に共通点がある。また接語の子音重複は弁別性がなく、母音は specific と generic で i/a の対立が見られるが、=ki と=kka は意味的にもほぼ同等な接語である。しかし Tosco (2010:330, (30)) と筆者資料(8c-d)は統語的に異なっている。前者では接語=kka の付加された 1 つ目の動詞は先行詞を修飾する関係節となっており 2 つ目の動詞がこの節の述語となっているが、後者では 1 つ目の動詞は主語と副詞句を持つ動詞述語であり節を成しているため 2 つ目の動詞は別の動詞節である (例(10))。

- (10) Tosco (2010) : [[?olokko]_{head} [ho koro poqh:a=kka]_{modifier}]_{subject} [i=ʕaka=pa]_{vp}
 筆者資料(8c) : [garo dokko hayna]_{subject} [[haallikko^sora ...]_{adverbial} [ogayi=ki]_v]_{vp} [ʕaga]_{vp}

ただしʕaga「存在する ; いる、ある」が単独で動詞節となっているこの分析は暫定的なもので、今後は他の資料も用いて確認する必要がある。だがインフォーマント本人やその他の話者から得た情報から、ʕaga の主語は ogayi=ki「来た」と同じ garo dokko hayna「この 1 つの氏族」であり、(8c)の当該個所を逐語訳すると「この 1 つの氏族は東の地 (つまり) ボラーナ村の方角から来て、(今もここに) いる」となることは確かである。

(8e)は Amborn et al. (1980) のいう副詞節を含むもので、当初は接続詞 haani が sheege=pa の動詞節に含まれていると考えたが、インフォーマント G.A.本人に改めて確認したところ、後続する ogayini の動詞節に含まれていることが分かった (例(11))。

- (11) [[gaffe saka]_{subject} [gaffe^gaffe]_{object} [sheege=pa]_v]_{main} [haani [ogayini]_v]_{subord}
 clan these clan_by_clan have.PF.3CP =LNK after come.PF.1CP

内容的にはどちらの分析でも重大な問題は起きない（「これらの氏族はそれぞれに分かれた後に、私たちは来た」vs.「私たちが来た後に、これらの氏族はそれぞれに分かれた」）が、内容的には「オスピコ氏族（＝ガウワダ村住民）が他の氏族よりも早期に現在のアッレ地区に来た」という歴史的背景⁸があるということで後者の解釈（例(11)）が正しいということが明らかとなった。

(8g)はこの資料の中で最長で、5つの動詞節が接続されている。最初の2つについては先行詞を修飾する関係節となっており、Tosco（2010）が主張する対照標示の接語=ka が付加されることで、「ボラーナから来たものも、北方から来たものも」というように英語の not only... but also あるいは both A and B に相当する表現をしている。それ以降の動詞節は主節形完結相と接語=ba によって構成された基本的な等位接続となっている。

4. おわりに

先行研究に見られなかった「主節形完結相=ki+ʕaga（主節形非完結相）」という現在完了の表現や、接続詞が動詞に先行する副詞節などが筆者の収集した資料では確認された。Amborn et al.（1980）の従属節形や Tosco（2008）の連続形などが本稿で例示した資料には現れなかったため、筆者の持つ分析の済んでいない言語資料を利用し、これらの動詞形を検討することを今後の課題としたい。

またアッレ語低地方言の問題として、有声音と無声音の間に揺れがある場合にどちらの音素を用いて表記するかという課題が浮かび上がった。これに関してはアジスアベバ大学でアッレ語表記法の研究をしている Haregewoin 氏らと連携し、話者であるインフォーマントらの意見も聞きながら解決していきたい。

参考文献

- Amborn, H., G. Minker, and H.-J. Sasse (1980) *Das Dullay: Materialien zu einer ostkuschitischen Sprachgruppe*. Berlin: Dietrich Reimer.
- ሀረገወይን ከበደ [Haregewoin Kebede] & ዮናስ በቀለ [Yonas Beqele] (2005 EC) የከሌ ቋንቋ ስርዐተ ጽምፅ እና ስርዐተ ፅህፈት (*Sound System and Orthography of Ale*). Addis Ababa: Addis Ababa University, Institute of Ethiopian Studies.
- Tosco, M. (2008) “Between Coordination and Subordination in Gawwada.” In: Z. Frajzyngier & E. Shay (eds.) *Interaction of Morphology and Syntax: Case studies in Afroasiatic*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 207-226.

⁸ 「歴史的」と称したが、アッレの歴史に関する文献は（文字を持っていなかったこともあり）存在せず、何世代も口承されてきた「知識」に基づいている。

Tosco, M. (2010) “Why Contrast Matters: Information structure in Gawwada (East Cushitic).” In: I. Fiedler & A. Schwarz (eds.) *The Expression of Information Structure: A documentation of its diversity across Africa*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 315-347.

Yoshino, H. (2013) “Preliminary Survey on ‘Alle Verbal System.’” *Studies in Ethiopian Languages* 2. 82-95.

(吉野宏志 筑波大学大学院生 hiro231287@gmail.com)

An Observation on the Connection of Alle Verbal Clauses

YOSHINO Hiroshi

It is said to be difficult to clearly separate coordination and subordination in Alle language (Amborn et al. 1980: §98). Adverbial clauses are often introduced by postpositions, and thus it is easy to spot it; however, the possible combination of verb-forms and verbal clitics varies considerably (Tosco 2008: 213-223). In this paper, the present writer will observe the connection of verbal clauses in Alle along with the literature, using his own materials collected independently through the fieldwork in Ethiopia.